

大豆

大豆が窒素を最も必要とする時期は、開花期から子実肥大期にかけてであることから、開花期以降の窒素栄養状態を良好にすることで、落花、落莢を防止し増収につなげる。

肥料名	施肥量 (10a当たり)	追肥時期
L Pコート (40日)	6～8 kg 現物	7月/中旬 (最終培土)
硫 安	20～40kg 現物	8月/月上旬 (開花期)
尿 素	10～17kg 現物	

追肥方法
生育状況を見ながら開花期の追肥を行う。

注意!

ツメクサガ・ウコン・メイガ等の発生が多くなっているため以下の薬剤を散布する。
葉が濡れている場合、肥料焼けが生じるので注意する。
L Pコート追肥後は必ず培土を行い、生育促進を図る。
開花時に過繁茂で倒伏の恐れがある場合や、開花期が8月中旬以降になる場合は、追肥を中止する。

散布時期	基準薬剤	回数	倍数	散布量 (10a 当たり)
7月中旬～7月下旬 (7月10日～7月25日)	プレバソンフロアブル	2回	4,000倍	100～300 ℓ
	パーマチオン水和剤	3回	1,000倍	

メロン

防除
着果後、アブラムシの防除にはウララDF 2,000倍液、ダニとの同時防除には、マブリック水和剤2,000倍液を散布する。

りんご

見直し摘果で良品生産を!
災害対策を万全に!

着果量の見直し
早めに見直し摘果を行い、樹勢に合った適正な着果量とする。なお、場所によってはサビ果や変形果が多く見られる園地もあるので、これらに注意して作業を進める。

徒長枝整理

徒長枝が繁茂すると樹冠内の日当たりが悪くなるばかりではなく、薬剤の散布ムラが生じ、病害虫の発生源となるので、随時不要な徒長枝は切り取って処分する。

支柱入れと枝吊り

果実の肥大とともに枝が下がり始めるので、樹冠内で日光が入るようにし、作業性や薬剤散布効率をよくするために、支柱入れや枝吊りを行う。支柱を入れる際は、スビードスプレーヤ(S)の走行に支障がないように注意する。

草刈り

夏場はりんご樹と下草の養水分の競合が激しくなるので、草は伸びすぎない内に早めに刈り取る。なお、疫病の感染を防ぐため泥をはね飛ばさないようにする。
※特にダニ剤を散布する、2～3日前には、必ず草刈りを終わるようにする。

クワコナカイガラムシ対策

バンド巻きを実施した場合は、7月上旬(ふ化期)までに必ず取り外し処分する。
2回目のバンド巻きは、8月上旬に実施する。

7月上旬及び8月上旬に防除剤を加用する。発生の多い所は、胴木洗いをしないと効果が薄い。
ただし、農薬の安全使用基準(収穫前日数)は必ず守る。

腐らん病対策

夏場は病斑の拡大が一時停止しているが、

花びらの除去

果実の尻部に、花びらを残しておくと、雨の多いときに雑菌が付着し、カビが発生したり腐敗の原因になるので、軍手などで、きれいに取り除く。
収穫7日～10日前には、バラ色カビ病の防除にダコニール10000の10000倍液を散布する。

収穫

糖度15度以上とし、タカミメロンは、つる元のヘタの盛り上がりや苦土欠症状、着果後の日数などを総合的に判断し、試し切りを行い2～3回に分けて収穫を行う。
レンゴメロンは、収穫時の判定が難しいが、着果後55日頃を目安にする。ヘタの周りの濃いグリーンが淡くなり、白っぽくなったら、確実に収穫できる。
収穫に迷った場合は営農指導員と相談して収穫しましょう。

すいか

防除

着果時からソフトボール大以前に行くと、玉の肥大が悪くなるので行わないこと。
着果後バレーボール大になったら、テルスター水和剤10000倍液とベルコート水和剤10000倍液を散布して、アブラムシ、炭そ病、つる枯れ病などの防除を行う。

葉面散布

生育の良いところでは必要ないが、樹勢を考慮して、着果30日以降は、アミグロ液肥800倍液を散布する。(高温時はヤケが発生しやすくなるので注意)
苦土欠等の葉色淡化が見られる場合は、トップスコア・リン10000倍液を使用する。

収穫

大玉は着果後43日前後に試し切りを行い、糖度は最低12度を目標にして収穫する。
小玉すいかは着果後29日前後に試し切りを行い、糖度は最低12度を目標にして収穫する。
雨が多くと炭そ病が出やすくなるので、アントラコール顆粒水和剤またはシクナムWDGを散布する。

降雨により未処置病斑から胞子が飛散し、来年以降の発生につながる。胴腐らん、枝腐らんと同発見次第直ちに適切な処置を行う。

ビターピット対策

今後、降雨量が多いと着果量が少ない樹や、樹勢が強い樹はビターピットの発生が懸念されるので、カルシウム剤を積極的に散布する。

これからの薬剤散布

薬剤散布の際は、農薬のラベルを必ず読み、使用基準、使用回数、年間使用回数、収穫前日数を確認し、下す。

散布時期	基準薬剤	使用基準 (収穫前日数)
7月半ば (7月15日頃)	1. 展着剤 2. オキシンドー水和剤 (80) 又はキノンドー顆粒水和剤 (60) 3. ベンレート水和剤 又はトップジンM水和剤 4. フェニックスフロアブル 又はサムコフロアブル	14日前日 14日前日 前前前 前前前
	※前回ダニ剤を散布しない場合は、ダニの発生に応じてダニ剤を散布する。 ※アブラムシの発生が多い場合は、ウララDF、コルト、トランスフォーム、キラップのいずれかを加用する。	
7月末 (7月30日頃)	1. 展着剤 2. ダイパワー水和剤 3. ダントツ水溶液 4. (カルシウム剤)	前日 前日 前日 前日
8月半ば (8月15日頃)	1. 展着剤 2. イカズチWDG 3. (コロマイト乳剤) 4. アリエッティC水和剤 5. (カルシウム剤)	前日 前日 前日 前日
	注1) ダニの発生がない場合は、次回へ入れる。 ※カルシウム剤・スイカル・セルバイン・カルハード・ストビットII 早生種など収穫前日数に注意!	

ネギ

軟腐病が出始める頃になりますので、土寄せ時に防除を実施しましょう。
また、近年はネギコガ・ハモグリバエが増えていますので、ほ場を見回り早めの防除を徹底してください。



水稲

「青天の霹靂」の玄米タンパク質含有率基準は6%以下!

追肥時期が幼穂形成期より遅れると、玄米タンパク質含有率は確実に高くなる。

水管理

生育時期	寒い日	暖かい日 (暑い)	備考
幼穂形成期	10cm程度で10日間		障害不稔の発生は平均気温20℃以下、最低気温17℃以下
穂ばらみ	15～20cm	4cm程度で時々水の入れ換え	
出開花期	10cm程度	5～6cm程度で時々水の入れ換え	最高気温が25℃以下では開花・受精不良
登熟期	10cm程度	2～3cm程度で時々水の入れ換え	台風時は6cm程度
落水時期	湿田では出穂後20～25日 乾田では出穂後30～35日		

病害虫防除

◇葉いもち病
最低気温18℃を超える日が2日以上続いた場合や、最低気温が16℃以上に達していて朝露や霧の晴れない日が続いた場合に感染しやすい。
感染に好適な日が出現した7～10日後頃からほ場を見回って早期発見に努め、発生を認めたら直ちに茎葉散布剤により防除を行う。また、病勢の進展が止まらない場合、5日毎に成分の異なる茎葉散布剤により薬剤散布を行う。

穂いもち病

◇穂いもち病
穂いもちは出穂直前、穂前期の2回散布を基本防除とする。出穂直前とは走り穂

ウイ. 果実の熟度を進ませる傾向があるの
で、収穫を遅らせないようにする。
エ. 本剤を2回又はそれ以上散布したり、極端な早期散布をしたり、又、着色増進剤等を併用すると果実の軟化や油あがり
が著しく早まるので、基準以外の使い方は行わない。
オ. 早生種(つがる)と区別して落果防止剤を散布し、着色管理も区別して行う。

軟腐病防除: オリゼメイト粒剤(6kg/10kg) 殺虫剤: グレーシア乳剤2000倍
肥料の吸い上げが悪いほ場では、トップスコアリンなどの葉面散布を併用すること。
露地の25cm出荷する場合は、最終培土を出荷20日前までに行うこと。

トマト

灌水の目安

7月下旬～8月上旬	毎日～1日おき	1株当たり 2ℓ
8月中旬～8月下旬	1～2日おき	1株当たり 2ℓ
9月上旬～9月下旬	最終着果20日以降、裂果防止の為控える	

追肥量の目安

使用方法	水量 (ℓ/株)	肥料名: 現物(倍数) / 1株		
		e・愛菜	OK-F-1	スーパーノルチッ
随時摘葉	3,000/株1.5	6.3kg (476倍) / 3.15g	3.3kg (909倍) / 1.65g	6.6kg (450倍) / 3.3g
無摘葉	4,000/株2.0	8kg (500倍) / 4.0g	4.2kg (944倍) / 2.1g	10kg (400倍) / 5.0g
使用時期	毎日～3日おき	通常の使用	3日以上曇天続き	尾ぐされ多発時 ※速効性カルシウムを補う。

※降雨の多い日は、原水と雨を合わせず、追水を控える。
※追水は、雨が降る日に行う。

通路灌水

5段果房開花時と7段果房開花時に、通路灌水と兼ねて通路にも追肥を行う。但し、7段果房の開花が8月中旬以降になる場合は行わない。